

研究テーマ 「幼児期に育てたい力」を育む環境や援助の工夫

～遊びの中にある資質・能力を読みとって～

教諭班は、各学年（複式学級は5歳児に含む）と預かり保育の4グループに分かれ、研修を行った。学年別グループでは、遊びの写真から子供の姿や環境構成・援助方法を読み取り協議した。更に「幼児期に育てたい力」に照らし合わせていくことで、育てている力やこれから育てていきたい力に気付くことができた。助言では、保育の悩みや課題に対し、解決につながるヒントやすぐに実践できる指導をいただき、研修を深めることができた。

《学年別グループ》

＜1グループ3歳児＞

- ・友達と同じものを身に付けたり、同じ場で一緒に過ごしたりすることが楽しいと感じるようになってきている。子供のつぶやきをヒントに環境を構成することで、遊びのきっかけづくりになることを学んだ。
- ・友達との関わりが増えると、いざこざも多くなる。教師は思いを仲介したり、思いを伝えるきっかけづくりをしたりしながら、子供に寄り添った支援を大切にしていきたい。

●助言者御指導（抜粋）

- ・子供なりに身の回りのことに自ら取り組もうとする姿が見られるようになってきた。そして、遊びの中で友達との関わり方を学んでいる時期でもある。一方で少人数の園も多いため、異年齢との関わりを通して友達と遊ぶ楽しさを感じられるようにしていくとよい。
- ・自らを客観視することが難しく、思いのまま行動するため危険を伴うこともある。安全に遊べるよう配慮したり、安全な遊び方について確認したりしていくことが大切である。
- ・3学期は友達と遊ぶ楽しさをより感じる時期である。教師は前後の状況を把握したり、子供の思いに寄り添ったりしながら、自ら関わっていけるような環境を整えておくことよい。
- ・教師には想像力と優しさが大切である。子供のつまずきの原因を想像して援助することや、一人一人の良い所を見つけ、ありのままの姿を受け入れる優しさをもち、保育していきたい。また、教師自身もリフレッシュしながら、心身共に健康な状態で保育ができるとよい。

＜2グループ4歳児＞

- ・遊びに必要なものを全て教師が用意するのではなく、遊びの中で子供が必要感を感じ自分で用意したり、言葉で思いや必要なものを伝えたりすることを大切にしていきたい。
- ・戸外遊びでは、様々な動きを楽しむことができ、やってみたくなるような環境構成が大切であることを学んだ。
- ・「こんな遊びをしたい！」という思いをもつことが、友達に思いを伝えたり試行錯誤したりする姿につながり、子供の育ちに重要であることが分かった。

●助言者御指導（抜粋）

- ・指導案どおりに保育をこなすのではなく、楽しかったと感じた理由を子供と振り返ることで、遊びの中の資質・能力を読み取ることになる。保育は計画どおりに進めることが難しいため、悩んだ時は職員で共有し、チームでねらいを達成していくことが大切である。また、幼児理解をしたうえで、個を尊重したオーダーメイドデザインの保育をし、保育の喜びや手応えに通じていけるとよい。
- ・子供が「やりたい！」と心が動くことで、自分なりに工夫したり、気付いたりして学びにつながっていく。日々の保育の中で、子供が意欲的になれる環境を教師がつくることが求められる。子供の思いを汲み取り、子供に合わせた柔軟な対応や丁寧な関わり方をしていくとよい。
- ・カリキュラム・マネジメントを進めるうえで、家庭と連携を保ちながら、教育の質の向上を考えることが求められる。研修を活かし、写真を使い具体的な遊びの場面から子供が身に付けている力や、身に付けようとしている力について保護者と対話して欲しい。

<3グループ5歳児>

- ・子供たちで遊びを進め、任せていくことも大切だが、十分楽しめる場や時間の保障をしながら、目的やイメージが共通になるように教師が仲立ちしていくことも大切である。
- ・子供が「やってみたい」と心動かすような教師の援助があることで、子供たちは目的の実現に向けて必要なものを考えたり準備したりする。その中で、自分の思いを伝えたり友達と協力したりしながら主体的に遊び、育っていくことが分かった。

<複式学級>

- ・目的をもって遊ぶためには、思いやイメージを引き出せるような、教師の丁寧な関わりが必要である。また、思いやイメージを実現できた時には、それまでの過程を十分に認め、達成感を感じられるよう関わっていくとよいのではないか。
- ・遊びを進める中で、意見が偏ってしまったり、思いが伝えられなかったりする子もいる。教師は子供の内面を探り、子供同士の橋渡しをしたり、見守ったりしていきたい。

●助言者御指導（抜粋）

- ・教師は一人一人がどのようなイメージをもっているのか、どのくらい共通になっているのかを確認していくことが大切である。時には教師が間に入り、子供たちのイメージを言葉にして確認することで、イメージを近付けていくことが大切ではないか。
- ・年長児になると、遊びの目的や意図を相談したり共有したりして遊びをつくるようになる。子供たちに任せながら、時には教師が一つの事柄をクラスの問題として取り上げ、一緒に考える場をつくる必要がある時もある。また、主体的、自律的な行動を促すことが多くなる時期だが、丁寧に思いを受けながら子供に任せたり見守ったりすることが、子供の成長につながる。人と関わる力について子供の様子を振り返ってほしい。
- ・複式学級では3・4歳児は年長児に憧れをもっている。年長児になったらできる特別感のある経験を残しておくことで、「年長になったらやりたい」という気持ちにつながっていく。そして年長児になった時の生活や遊びへの取組が変わっていくのではないか。

<預かり保育グループ>

- ・異年齢児の遊びや環境構成、関わり方の工夫を知ることができた。また、保育の疑問や困り感に対して、各園の具体的な取組について聞くことができ参考になった。
- ・各園の週案や活動計画を持ち寄り、様々な形式に触れることができ、内容のおさえも学ぶことができた。立案や計画の見直しは、学年の発達を配慮し立てる必要がある。

●助言者御指導（抜粋）

- ・すべての学年の発達をおさえ、異年齢での育ち合いの中で願う姿を明確にもちながら、保育をしていく必要がある。例えば、年少児との関わりの中で年中・年長児が自己有用感を高める等、異年齢児の集団だからこそ経験できることがある。その点を意識して保育計画を立案、実践していけるとよい。
- ・預かり保育では、子供たちが学級とは異なる姿を見せることがある。子供の気持ちを敏感に感じたり、気付いたりしながら丁寧に関わっていく必要がある。また、その姿は担任とも共有していくとよい。子供の多面的理解を深め、より一層、個に寄り添った保育をしていくことにつながっていく。
- ・幼稚園教育要領第3章には、教育課程に係る教育時間の終了後等に行う教育活動などの留意事項が明記されている。折に触れて振り返り、地域資源や人材の活用等、自園でできることは何か考え、実践につなげていけるとよい。

